

なぜ、社会教育は「社会教育」と命名されたのか（その4） —佐藤善治郎『最近社会教育法』の歴史的 position づけをめぐって—

Why is it called “Social Education” On The Historical Position of Zenjiro Sato's “Social Education”

佐 藤 三 三*
Sanzo SATO*

はじめに—本稿の課題—

- I 山名次郎『社会教育論』との関係
 - II 社会教育の定義の視点—教育の主体と教育の対象—
 - III 社会教育の目的—学校教育の補完と国家の形成—
 - IV 佐藤善治郎の社会教育論の骨格—「社会教育」と「社会」と「国家」の関係—
- おわりに—佐藤善治郎の社会教育論の特徴—

要 旨

山名次郎の『社会教育論』（1892年）と佐藤善治郎の『最近社会教育法』（1899年）は、その出版年を大きく異にするにもかかわらず、社会教育論の「草分け」として、あるいはまた内容的には「社会改良的社会教育論」として常に一括されてきた。しかしながら両者の社会教育論は全く別の物である。本稿は、山名次郎『社会教育論』との関係において佐藤善治郎『最近社会教育法』の社会教育論史上の位置を明らかにした。

キーワード：「社会の教育」的社會教育論・「社会の形成力」改善的社會教育論

はじめに—本稿の課題—

前稿『（その3）』において、次の点を明らかにした。これまで、山名『社会教育論』の日本社会教育論史上の位置を明確にできなかった最大の理由は、山名以前の「社会教育論」、即ち、日本最初の社会教育論を確定できなかったために、山名次郎の『社会教育論』（1892年）と佐藤善治郎の『最近社会教育法』（1899年）を、その出版年を大きく異にするにもかかわらず、社会教育論の「草分け」として常に一括してきたことにあったこと。また、日本最初の社会教育論を『社会の形成力』改善的社會教育論として確定することによって、山名をそれとの関係において位置づけることが可能となっただけでなく、山名を佐藤から切り離すことも可能になった。

上記のような作業の進展は、山名次郎と佐藤善治郎

の関係を新しい角度から再検討する条件が整ったことを意味する。佐藤は山名『社会教育論』との関わりを認めていないが、山名に全面的に依拠しながら自説を展開し、構築したことは明白である。本稿は、山名次郎『社会教育論』との関係において佐藤善治郎『最近社会教育法』の社会教育論史上の位置を明らかにするものである。

I 山名次郎『社会教育論』との関係

1. 経歴

佐藤善治郎は1870（明治3）年千葉県農家の農家に生まれた。1885（明治18）年小学校卒業後、補助教員を2年勤め、18歳で千葉師範学校に入学した。「あたかも森有礼文相によって、師範教育の軍隊化が行われた時

*弘前大学教育学部教育学科教室
Department of Pedagogy, Faculty of Education, Hirosaki University

期であり、佐藤の千葉師範生活は、『喇叭の声に起こされ、喇叭の音によって眠る』兵営式生活であり、二年の時に帝国憲法発布と森文相刺殺事件に会い、四年の時に教育勅語の渙発に会っている。卒業後、郷里の母校で小学校訓導となるが、1895（明治28）年26歳で高等師範学校入学した。「日清戦争直後の『国運隆盛期』に際会し、『天下の広居に立って、時代を作るべき青少年を教ふる事は、人生の意義をなすものであると考へ』地位の安定と高給とを目指して発奮することを勧めた叔父の助言が、高師入学の理由であった」という。卒業後は神奈川師範学校教諭、私立横浜高等女学校校長等を歴任、その後「私立神奈川高等女学校を設立して校長となり、長く同校の経営に当たって、一九五七（昭和三二）年に死去した」¹⁾。また著書『最近社会教育法』は1899（明治32）年、「高等師範学校の在学時代に書かれた卒業論文『社会教育法』に加筆して出版された」²⁾。

他方、山名次郎は1868（明治元）年薩摩藩士の家に生まれた。1883（明治16）年慶應義塾入学。1885年卒業と同時に岐阜県警に就職。1887（明治20）年時事新報社記者となり、1890（明治23）年北海道教育課長心得兼北海道尋常師範学校校長。そして1891（明治24）年にそれを辞任、帰京し、その翌年の1892（明治25）年に『社会教育論』を刊行した。

佐藤は山名と全く同じ時代を生きたといっている。しかしその航路は大きく異なっていた。山名が教育とは遠いところにあって、ほんの一時期、いわば天下り的に教育の経験をもったにすぎなかったのに対して、佐藤善治郎は、生粋の教育者であった。

2. 山名『社会教育論』との関係

佐藤は、「予が此編を書かんとせしは一朝一夕の思ひ立ちにはあらず数年前より新聞雑誌に注意し社会学教育学に注意し又社会問題に関する大家の講演を聴き又自ら社会教育に関する組織団体あるいは貧民窟を検討せしこともありて自らは相応に研窮した」³⁾と自負している。佐藤は、山名『社会教育論』に直接言及することはなかったが、両者を比較してみると、酷似した表現や主張が随所に見られる。例えば、佐藤の「予が社会教育と謂ふは学校教育に対する名称にして社会其物を教育し知識道徳を高めんと云ふにあるなり」⁴⁾という言い回しは、山名の「然らば如何なるもの之を社会教育と称するやと云へば社会教育とは国家教育に対するの名称」⁵⁾である、というそれに酷似している。

「社会」の捉え方も同様である。山名の「秩序ある人民の集合体にして彼の人々個々分離し相ひ互に連絡交通を欠ける半開以上の者の集合せる一体を称して先づ社会と名けて可なるべし故に社会とは苟も彼是の間に交通して吉凶相ひ救助する者は仮令其地は東西隔離し又た政府を異にすと雖も総て社会と称することを得べし」⁶⁾に対して、佐藤は『秩序ある人民の集合体にして彼我の間思想或は物資の交通行はれ慶事は相喜び困難相救ふ処の有意的結合を云ふものにして仮令地は相隔離し或は政府を異にすと雖も凡て社会と称すべし』⁷⁾と述べている。あるいは佐藤のいう「欧米諸国は文明の進歩するに従ひ万能を政府に求めずして社会自ら教育せんとし種々民間の団結発達して社会の知識を高め風紀を維持し幸福を享受せんとするなり」⁸⁾といった表現などは、山名社会教育論の基調と同一である。佐藤は山名に多くを負っている。あるいは山名『社会教育論』をベースにしながら持論を展開したといっているであろう。しかし山名のことに一言も言及しなかった。「社会教育学とは如何なる順序系統に由て組織すべきものなるか予は之を知るを得ず何となれば従来社会の改良教育に関しては短篇の論文としては常に之を見るも系統的秩序の網羅的に論述せしものは未だ之を見ざればなり」⁹⁾と述べる中で、佐藤はさらりと山名を切り捨てたのであろう。佐藤は山名の「社会教育論」を参考にはしたが、「系統的秩序の網羅的に論述せしもの」とは見なさなかったということであろうか。

いずれにしても、佐藤の社会教育論はその多くを山名『社会教育論』に負ながら、山名とはまったく異なる社会教育論を展開した。山名『社会教育論』あつての佐藤『最近社会教育法』であった。

II 社会教育の定義の視点—教育の主体と教育の対象—

社会教育の教育対象という点では、山名もまた「此社会を薰陶教化する」¹⁰⁾と述べるなど、社会を教育対象としていたことは明白であるが、「社会教育とは国家教育に対するの名称」という定義の中にはそのことは全く表現されていない。この定義によって山名が強調したことは、社会教育の「対象としての社会」ではなく、社会教育の「主体としての社会」であったであろう。これに対して佐藤善治郎は、「社会其物を教育し知識道徳を高めんと云ふにあるなり」と定義することによって、社会教育の「対象としての社会」を強調した。こうした両者の相違は、山名が、明治20年前後に形をなしてきた日本最初の社会教育論を多かれ少

なかれ前提条件としなければならなかったのに対して、佐藤の場合は、山名の社会教育論を前提条件としなければならなかったということと深く関わっているように思われる。

1. 山名次郎—教育の主体—

山名次郎の場合、明治20年前後に形を整え始めていた社会教育論、即ち、学校教育の徳育の補完を目的として、生活上のさまざまな風習、風俗営業、風俗画、風俗小説等のいわゆる「風俗」＝社会による形成力とその改善行為を社会教育と称する社会教育論（「社会の形成力」改善的社会教育論）をふまえて自身の社会教育論を展開せざるを得ない歴史的宿命を負っていた。それゆえ、山名にとって、社会教育の対象は「社会」であり、学校教育の普及・補完が目的であることの2点は自明の前提であり、佐藤のようにことさらに社会教育の対象を強調する必要はなかったと推察できる。それでは一体、社会教育の「主体」の所在に力点を置いた定義へと山名を導いたものは何であったのであろうか。

北海道教育課長心得兼北海道尋常師範学校長に赴任する直前の山名は時事新報社記者であり、当時の彼の主要な関心事は、国家＝政府＝政治のありようにあった。とくに政府＝国家への権力の集中＝「政権過大の弊」を避け、政府の権力を、産業や文化や教育等のそれぞれの分野＝民間・団体＝社会に委譲して、多様な勢力が「平等なる時或は均一ならんとする時は其社会必ず文明の域に進み太平無事なるべし」状態を望んでいた。山名が目指す近代国家としての日本の核心は、「分業の進展」にあったのである¹¹⁾。教育分野においても「政権過大の弊」を避けるという発想が、山名にとって最も自然な帰結であった。明治20年前後に姿を現しつつあった学校教育の徳育の補完のための社会教育論に、山名はそれを応用した。山名は、「社会自身に教育を修めしめ」とか、「社会をして充分の補助協力を為さしむる」¹²⁾とか「社会は自ら自己を矯正し又善に進の工夫を為す」¹³⁾等、国家の役割である小学校教育の普及のために、国家ではなく「社会」がすすんで自己教育すべきことを強調したのであった。山名にとって重要なことは「社会が矯正され又善に進んだかどうか」よりも、国家が中心になって進めている小学校教育の普及のために、「社会が何をしたか」であったのである。

2. 佐藤善治郎—教育の対象—

佐藤善治郎の場合はどうであったであろうか。佐藤は山名の『社会教育論』に直接言及することは一切なかった。しかし、社会そのものや社会と個人の関係、社会と国家の関係等について随所で山名からの引用とおぼしき記述を発見することができる。日本最初の表題に社会教育を用い、社会教育について「もっともまとまった考察」を加え¹⁴⁾、『社会教育』という概念を始めて提起しようとする論述¹⁵⁾であった山名『社会教育論』を無視して自説を展開することは、客観的に見ても不可能なことであったであろう。

教育の主体に注目して行われた山名の「社会教育とは国家教育に対するの名称」という社会教育の定義は、高等師範学校において本格的な教育学を学んだ佐藤からすれば、常識を外れたものに写ったに違いない。一般的には教育の対象や場所に基準をおいて命名あるいは定義するものであるからであり、そもそも国家が行う教育という意味での国家教育といういい方は当時であっても存在しなかったであろう。いずれにしても佐藤は、教育の主体が社会であるか国家であるかによって社会教育と国家教育を峻別するという山名の社会教育の定義を強く意識せざるを得ない状況にあったことは確かなことであろう。その結果、佐藤は山名との違いを強調し、自説の独自性を前面に押し出す意味も込めて、「予が社会教育と謂ふは学校教育に対する名称にして社会其物を教育し知識道德を高めんと云ふにあるなり」と、「社会其物」の教育を強調する定義を試みたといえるであろう。

III 社会教育の目的—学校教育の補完と国家の形成—

いったいなぜ佐藤は、「社会其物」の教育を強調したのであろうか。これを解く鍵は、山名と佐藤の「社会教育の目的」論の違いの中にある。

「社会と個人」の関係についての認識ということであれば、倉内史郎が指摘するとおり、佐藤と山名の差は程度の差に過ぎない。

「山名、佐藤両氏の視点は、つねに、一大勢力たる『社会』に向けられていて、『個人』の側から社会教育を考えると云うことがない。個人が論じられるときは、それは必ず『社会→個人』の方向においてであり、個人は部分であって、全体である社会に統制されるもの、という見方である。個人の自由、個人の向上、個人の生活というようなことは問題にならず、社

会秩序の厳正な保持ということが主要な関心であり、個人は社会の秩序・制裁によって統制される存在としてしか考えられていない。こうした態度は、一方はなお封建的色彩の濃い社会観をもち、他の一方は社会有機体説に拠っている思想的基盤によるものであるが、同時にまた、それは日本の近代市民社会形成の過程での個の確立の程度をも反映するものであろう¹⁶⁾。また倉内は、「両氏ともに『社会』を、現実には『国家社会』としてとらえ、国家主義を指導精神としていること、および、佐藤氏にあってはそれに帝国主義の自覚が伴っている」¹⁷⁾とも指摘している。

山名も佐藤もこうした「社会と個人」の關係に貫かれた国家の形成を学校教育にも社会教育にも期待していたことには変わりはないであろう。しかし山名が、それを前提とした上で学校教育の補完を社会教育の目的としたのに対して、佐藤は前述のような「社会と個人」の關係に貫かれた国家の形成を学校教育と社会教育の双方に等しく課したのである。ここにおいて山名と佐藤は方向を決定的に異にすることになった。

山名の社会教育論は、「社会の自己教育」としての社会教育論であった。従ってそこには二つの目的が重なり合っていた。一つは学校教育による児童の徳育を補完するための社会教育であり、もう一つは小学校教育の普及をめぐる国家と社会の分業論としての社会教育論である。山名の場合、教育の要は学校教育であった。しかし徳育の面において学校教育だけでは効果が上がらないという当時の風潮に応える形で、「社会の形成力」を改善することによって学校の外において児童の徳育を強化することを社会教育に求めたのである。それが山名にとっての「社会教育の目的」であった。しかもその担い手を国家ではなく「社会」に求めたことに、山名の独自性が強く表現されていた。

他方、佐藤が展開した社会教育論は、学校教育の補完のための社会教育論でも、国家と社会の分業論としての社会教育論でもなかった。また「社会の形成力」改善的社会教育論でもなかった。佐藤は、国民が一体となった国家を形成するという同一の目的を学校教育と社会教育のそれぞれに課したのである。山名が文明論的観点から国家と社会の分業論として社会教育論を展開したとするならば、佐藤は、日清戦争後の国家高揚期にあって、帝国主義的国家のすすめとして社会教育論を展開したといえるであろう。佐藤の国家への傾倒は、教育勅語の制定・浸透期に師範学校に在学し、さらに小学校訓導、高等師範学校入学と、教育勅語を血肉として教師となっていたといったその時代背景

に大きな影響を受けている。さらに、すでに指摘したことであるが、佐藤の『最近社会教育法』は、「高等師範学校の在学時代に書かれた卒業論文『社会教育法』に加筆して出版された」。その高等師範に佐藤が入学したのは、日本の国家主義が高揚するきっかけとなった日清戦争の終結の年あったことも強く影響していたであろう。

山名は学校教育の補完を社会教育に求め、佐藤は国家の形成を学校教育と社会教育に求めた。この点において佐藤善治郎と山名次郎の社会教育論は根本的に異なっていたことを強調しなければならないであろう。そしてこのことが、「社会改良的社会教育論」「社会教育の源流」さらには「対策的社会教育論」として常に山名次郎とひとくくりにされてきた佐藤善治郎の社会教育論に独自の位置と役割を与える要点でもある¹⁸⁾。

IV 佐藤の社会教育論の骨格―「社会教育」と「社会」と「国家」の關係―

1. 「第二章『社会の性質』」

佐藤は第二章において「社会の性質」を論じている。山名よりも一層詳しく社会学的な社会の解説に取り組んだ。小川利夫に「社会学的社会教育論の萌芽」¹⁹⁾といわしめた所以である。第二章では個人と社会の關係に主たる関心を向け、「社会は一種の有機体なり」²⁰⁾という結論を強調している。そしてそこでは「個人」との關係を「吾等は社会が意識を有せる一全体なりと考ふると同時に其部分たる各個人も各々独立し意識を有し理性を有して比較的には自由自主を主張し得べき点あるを認むるなり」²¹⁾と捉えていたことに注目しなければならない。佐藤が社会学から学んだ社会とは、個人も独立し理性を与えられた「一種の有機体」・「一全体」であったからである。

2. 「第三章『社会の目的』」

しかし佐藤が到達したかった社会とは、学問としての客観的な事実としての社会（「一種の有機体」・「一全体」）ではなく、望ましい、あるべき現実としての日本の社会（「一種の有機体」・「一全体」）であった。個人よりも「社会＝国家の幸福」を一義的なものとするそれであった。その主張を展開するために設けられた章こそ「第三章 社会の目的」であったのである。佐藤は次のような論理によって、社会と個人の關係を再構築していく。

佐藤は、「社会は何が為に存在するものなりや」と自問し、最終的に「予は社会は相互に幸福を得んとするを以て目的とする」²²⁾という結論を導き出している。しかし最大の問題は、「個人の幸福と社会（或いは国家にても）の幸福と相衝突する場合は如何にすべきか」であった²³⁾。ここから社会学的社会論ではなく佐藤独自の「社会論」が展開されることになる。

「其個人の行為の目的が其事を忌むにあらずして快樂若しくは意識の満足より起こり社会或は国家のためになすことが其人の理性を満足せしむるものならんには其人の快樂と社会の幸福とは一致したるものなり、豈両者の間に一点の齟齬があらんや予は社会或は国家の為に尽くすものは必ず理性の判断に出たるものなるを信ずるなり」²⁴⁾。「国家に殉ずるとは自己の利害を君父の利害国家の利害と対視することなくして自己と云ふ觀念を君父国家と云ふ觀念内に埋没せしめ其内心に於て衝突なしに命を棄つるなり凡て発達したる社会強大なる邦国に於ては其人民は国家社会を重んじ吾を以て其一部分なりと思ひ決して其国家社会を他人視せざるなり」²⁵⁾。

こうした論理の上に、さらに佐藤は、国民が「社会国家の為に身を殺すこと」²⁶⁾を求めていく。「社会国家の永久維持の為に喜んで」²⁷⁾自己を滅することが出来る国民あるいはそうした世論の存在を切望した。しかしそうした理想の国家社会を脅かしている元凶がいくつかある。「己に一身一家の生活に余裕あるものなれば進みて社会公衆の福利を増進すべき者にて風俗習慣の因て出づる源泉なれば其責任至大にして上は皇室を奉護し国事に盡悴し下は貧民労働者の保護と罪惡人の感化当の事をなして社会の幸福を増進すべき義務あるもの」²⁸⁾でありながら、その責任を果たしていない「上中流社会」及び「学生社会」、そして「全社会の治安に関連すること甚だ大なり盜賊、放火、殺人その他の醜行惡徳は多くはこの階級より発する」²⁹⁾と指摘する「貧民社会」である。とくに佐藤は、「貧民社会」を「社会主義共產主義の如き破壊主義」の源と見、「予は世の頑固者を厭ふと共に急進者を忌むものなり之を調節して中庸を得るには健全なる上中流社会に求めざるべからず」³⁰⁾と強弁するのであった。ここにいう「上中流社会」「学生社会」そして「貧民社会」こそ「一種の有機体」あるいは「一全体」としての社会の主要なそして可視的な側面であり、教育（改良）の対象でもあった。

3. 学校教育そして「社会教育」と「社会」と国家の関係

さて、社会が存在する目的は、「相互に幸福を得んとする」ためであった。しかしながら、「個人の幸福と社会（或いは国家にても）の幸福と相衝突する場合」があることが最大の問題である。しかしその場合は、「社会を優先」すべきである。これが佐藤の最終的な結論であった。

「吾等は仮令人の要求なくも自ら進みて社会国家の為に盡し其精神其事業を後世に伝へ吾等が先人より受けたる社会を改良進歩せしめて後人に幸福安寧なる社会を伝へんと希はざるものなかるべし然らば其執るべき事業は那邊にありや」³¹⁾。こうして学校教育と社会教育の課題が述べられていくことになる。

社会の存在目的は、上記に見たように、少々飛躍して云えば、いはば教育勅語にいうところの「天壤無窮の幸運を扶翼する」ことにある。したがって、学校教育も社会教育も「天壤無窮の幸運を扶翼する」ことに資することでなければならない。問題は学校教育と社会教育の違いであり両者の関係である。佐藤は、学校教育と社会教育の違いあるいは関係を、社会的教育学の考え方に依拠しながら次のように明らかにしている³²⁾。

「前時代の思想を後時代に伝ふるを以て唯一の目的として立てるものは学校にして之に入るものは児童なり」。「国家の教育機関は主として之が為に存在するものなり即ち完全なる社会を形成し相互に幸福を享けんとするには之を組織する人間が先ず完全ならざるべからずされども完全なる人は不完全なる社会において出現すべきものにあらざれば其前に或いは少なくとも同時に完全なる社会を要するなり」³³⁾。続けて次のようにも述べている。「其教育の目的を達成せんとするには二面の教育機関を具へざるべからず一は学校教育機関（或いは国家教育機関）にして一は社会教育なりと、斯く云はゞ社会教育は或いは輿論教育環象教育など云ふべきものにして予は其環象の如何なる所に社会を害すべき原因が伏在するか如何にせばこれを除くを得べきか又如何なる方法を用ふれば善良となり進歩すべきか又児童に対して如何に影響するかを考究せん」³⁴⁾。

こうした佐藤の主張は、一見したところ、日本最初の社会教育論や山名次郎の社会教育論と同様に、「父母の言動」や「社会の風俗」をも含んだ社会による「形成」作用とその改善を「社会教育」と見なす「社会の形成力」改善的社会教育論の立場を継承しているように見える。しかし事実は全く異なっている。山名

と比較するときその違いは鮮明になる。

山名の場合、学校教育も社会教育も本源の対象は「児童」であった。ただし、学校教育は直接「児童」に働きかけ、社会教育は児童に悪影響を及ぼす「父母の言動」や「社会の風俗」に働きかけることを通して間接的に児童に働きかける点で異なっている。学校教育と社会教育の違いはそこにある。しかし佐藤の場合の本源の対象は「国家の安寧維持」である。そのために「天壤無窮の幸運を扶翼する」国民と社会を形成することである。その目的を達成するための教育手段・対象として二つを佐藤は挙げる。一つは「児童・個人」に直接働きかけて「天壤無窮の幸運を扶翼する」意識と行動力を備えた国民に形成することであり、これを学校教育が担う。もう一つは、「児童・個人」とは独立して存在する「一種の有機体」・「一全体」としての「社会」である。その「社会」をして「天壤無窮の幸運を扶翼する」意識と行動力を備えた国民を再生産し続けるような仕組みとしての「一種の有機体」・「一全体」へと作り上げることである。佐藤善治郎にとって、「社会」を教育する目的は、学校教育を補完するためではなかった。「国家の安寧維持」のためには、「天壤無窮の幸運を扶翼する」国民と社会を同時に形成することが必須であると見た佐藤にとって、学校教育と社会教育は同格のそれぞれ独立した教育であった。一方は「児童・個人」を、他方は、それらから独立して存在する「一種の有機体」・「一全体」としての「社会」を教育対象とすることによって、「国家の安寧維持」のための「天壤無窮の幸運を扶翼する」国民と社会を形成する同格の教育であったのである（表1）。これが佐藤のいう「社会其物を教育」する意味であった。

おわりに—佐藤善治郎社会教育論の特徴—

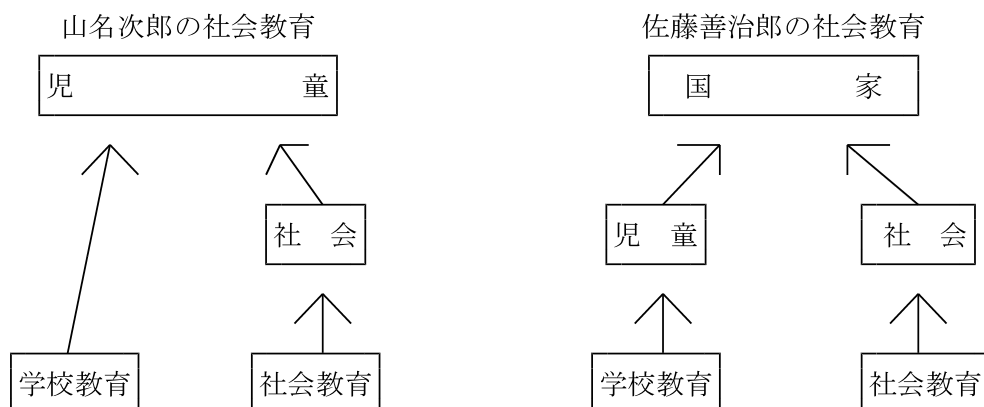
1. 風俗から世論へ

日本最初の社会教育論である「社会の形成力」改善的社会教育論は、筆者が、主として、『社説 教育報知ノ改良（1886・明治19年11月20日）』、『社会教育の概目（1887・明治20年4月、第73号）』および『加藤弘之君の徳育論（「読売新聞」・1888・明治21年5月15日）』の3資料から導き出して命名したものである。従って、特定の当時の誰かがそう命名したものでもないし、そもそも当時にあつては、社会教育の定義らしきものを試みた者はいないのである。当時は、「父母の言動」や「社会の風俗」による「形成」作用とその改善を「社会教育」と見なす社会教育論である。『社説 教育報知ノ改良』は、とくに「父母」が「頑迷事理ヲ辨ゼザル」こと、「其風習ノ卑汚ナル」こと、「教育ノ何タルヲモ知ラザル」ことの児童生徒への悪影響を強調している。『社会教育の概目』は、「父母・教師の言動」と「習俗・流行物・音曲」等のいわゆる「社会の風俗」の他「家屋の構造・衣服の製方」や「新聞」等まで加えたかなり広いものを挙げている。『加藤弘之君の徳育論』は「演戯、軍談、講釈、浄瑠璃、俚歌、新聞、雑誌、角力、玩具等」の「社会の風俗」が中心である。また同じ頃『教育報知』（1886・明治19年第46号）に掲載された姫路中学校教諭信原謙造の『「ハーモニー」ニ就テノ話』は「児童ノ父母タルモノノ古風」＝「旧弊社会」を強調している。

これらにいう社会とは、児童に対して悪影響を及ぼすであろう個々の事象、個々の風俗、社会の個別的側面を称していた。

これに対して山名は、「一種の有機体」・「一全体」としての社会の概念を持ち込んだ³⁵⁾。しかしながらそ

表1 山名次郎と佐藤善治郎の社会教育論の骨格



それはそれだけのことであって、社会教育の主体という時の社会は、政治・経済・文化等の様々な領域で支配的地位・職業にある人々＝階層もしくは種々の団体・協会を指していたし、社会の形成力というときの社会も、日本最初の社会教育論と同様に、「父母の言動」や「社会の風俗」等、社会の個別的側面を意味していた。

これに対して佐藤善治郎は、社会を「一種の有機体」・「一全体」とすることで一貫していた。したがって、日本最初の社会教育論者や山名等と、社会の改善の方法、即ち、社会教育の方法を大きく異にしていた。日本最初の社会教育論者や山名等が、児童に対して悪影響を及ぼすであろう個々の事象、個々の風俗、社会の個別的側面の改善に注意を向けていったのに対して、佐藤は「社会其物を教育」することを主張し、そのために「世論教育」「善良なる世論」「社会の制裁」の形成を強く訴えた³⁶⁾。「輿論」や「社会の制裁」はまさしく「一種の有機体」・「一全体」としての社会そのものであったからである。

2. 形成・不覚から教育へ

日本最初の社会教育論や山名の社会教育論のもう一つの特徴は、学校教育の「意図的な教育」に対して、社会教育は「無意図的な教育」＝「形成」であることを自覚的に強調したことである。『社説 教育報知ノ改良』は、社会教育の特徴について、「文明教育ノ何者タルヲ不知不識ノ間ニ覚悟セシメン」とか「社会各般ノ事物苟モ人ノ五官ニ触ルニ限りハ良カレ悪カレ多少ノ利害ヲ教育上ニ感ゼザルモノナク」等の点を強調している。

この点は山名次郎の社会教育論も同様である。何をもって「社会の形成力」と呼ぶかは日本最初の社会教育論者の間でも違いが見られるように、山名もまた独自の視点を示している。しかしおよそ「父母の言動」や「社会の風俗」による形成作用とその改善を社会教育と見なしている点では共通している。また「社会教育は社会人民の道徳を維持するのみならず社会四囲の現象事情に因り児童を始め貧困にして無学なるものをして不覚の内に智識を得せしめ実業を励むの念を起こさしむる」³⁷⁾ ことと述べることで、社会教育の特徴は「不覚の内に智識を得せしめ」ることにあることを強調している点でも共通している。山名社会教育論を日本最初の社会教育論にならって「社会の形成力」改善的社会教育論と名付けた理由である。

佐藤善治郎の場合はどうであろうか。「社会其物を教育」するのが社会教育であるから、そもそも「形成（不覚）」の概念とは無縁である。佐藤が社会教育＝輿論教育環象教育を研究するのは、それらの「如何なる所に社会を害すべき原因が伏在するか如何にせばこれを除くを得べきか又如何なる方法を用ふれば善良となり進歩すべきか又児童に対して如何に影響するかを攻究せん」である。輿論や環象の児童への影響にも言及しているが、基本はそれらが如何に「社会を害するか」を明らかにすることにあつた。佐藤は、社会教育に関する問題の組み立て方そのものを日本最初の社会教育論や山名次郎の社会教育論とは異にしていたのである。

3. 社会学と社会的教育学

日本における社会学は、「明治10年代から30年代にかけてスペンサーやコントの総合社会学が導入され、その社会理論＝社会有機体論は、加藤弘之（1836－1916）、外山正一（1848－1900）、有賀長雄（1860－1921）、建部遯吾（1871－1944）らによって、初期の展開期を形成したが、佐藤はこうした社会学から、とくに「個人」と社会との関係について、「吾等は社会が意識を有せる一全体なりと考ふると同時に其部分たる各個人も各々独立し意識を有し理性を有して比較的には自由自主を主張し得べき点あるを認むる」³⁸⁾ものであることを学んだ。しかし、日本社会学が「特殊日本的に『修正』され、自由民権運動や労働組合運動に対抗する絶対主義的天皇制国家の『秩序』の理論として提唱された」と指摘されるが³⁹⁾、佐藤もまたその一人であったといえるであろう。しかし佐藤の場合、個人も自立した一全体としての社会を「絶対主義的天皇制国家の『秩序』の理論」へ「修正」するために用いたものは「社会的教育学」であった。あるいは佐藤が修正した社会的教育学であったといった方が正確かも知れない。

4. 「社会の教育」的社会教育論

1) 「社会改良的」社会教育論とは何か

宮坂広作は、山名次郎『社会教育論』、佐藤善治郎『最新社会教育法』、井上亀五郎『農民の社会教育』をひとくくりにして「社会改良的社会教育論」と呼んでいる。そして宮坂のこの見解は一般的にも受容されている。しかし宮坂のその論拠は定かではない。山名自

身「教育も亦た社会人事の一なれば之に依りて社会の改良進歩を図らんと欲せば……」と「社会の改良」を唱い⁴⁰⁾、佐藤善治郎は社会教育とは「社会其物を教育」するものであり、具体的な教育の方法・機関を「社会改良に関する機関」⁴¹⁾と呼び、井上亀五郎は「農民社会の改良」⁴²⁾を強調しているからであろうか。松田武雄の場合は、1887（明治20）年4月の『教育時論』73号に掲載された論文『社会教育の概目』について、「子どもの教育をめぐる環境改善を意図したものであり」「その親である庶民を念頭に置いて説かれた社会改良的、風俗改良的な、あるいは生活改善を促す社会教育論である」と評しているが⁴³⁾、それが改良の対象として具体的に挙げていたものは、「父母教師の躬行」「庶人の習俗」「流行物」「歌舞演技音曲等」「宴会並びに交際の模様等」「新聞並びに絵画等」であった。こうして見てみると、「社会改良的」社会教育論という用語は一般化している割にはその内容は曖昧である。

小川利夫は山名『社会教育論』の「社会改良的」側面について次のように指摘している。「山名にとって教育とくに社会教育の眼目は産業革命期とともにようやく顕在化しつつあった社会問題とくに労働貧民問題を教育の問題としてとらえ、そのような社会問題としての教育の組織化を図ることによって社会問題そのものの解決—『社会改良』的解決—を図る点にあった」⁴⁴⁾。いいかえるならば、社会改良とは「資本主義制度の欠陥を認めながらも、制度的にはこれを是認し、資本主義の枠内でその改善を図ろうとする思想ないしは運動の原理」⁴⁵⁾のことであろう。

そうであるならば、山名の社会教育論は、小学校教育の徳育の補足（普通教育の普及）にあったのであり、そのための社会＝風俗の改善が社会教育の目的であった。したがって、山名社会教育論は、これまでも繰り返して述べているように、正確には、『社会の形成力』改善的社会教育論というべきであって、「社会改良的」社会教育論というのは誤りではなかろうか。

2) 「全体社会」の社会教育論としての佐藤社会教育論

「資本主義制度の欠陥を認めながらも、制度的にはこれを是認し、資本主義の枠内でその改善を図ろうとする思想ないしは運動の原理」を社会改良というのであれば、山名よりも佐藤の方が遙かに資本主義の制度から生まれる諸問題に注目し、共産主義や社会主義に嫌悪感をあらわにしていた。「貧民社会」「職工問題」「犯罪人に関する問題」等に注目し、批判的観点から極めて多くのページをそれらの現状の紹介に割いてい

る。しかしながら山名がそうであったように、佐藤も資本主義制度そのものの維持が目的であったわけではなく、「天壤無窮の幸運を扶翼する」国民と社会の形成こそが本来の目的であった。そのための諸問題、社会がかかえる諸問題の教育的改善改良、即ち、「社会其物」を教育する教育＝社会教育の重要性を訴えた。佐藤社会教育論は、「全体社会」の社会教育論と呼ぶのが適切であろう。

<注>

- 1) 宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』、法政大学出版局、1968年、p 223～224
- 2) 石堂 豊「佐藤善治郎」（全日本社会教育連合会『社会教育論者の群像』、1983年、p 49）
- 3) 佐藤善治郎『最近社会教育法』（小川利夫監修『社会教育基本文献資料集成・第1巻』、大空社、1992年、緒言 p 3）
- 4) 同上、p 2
- 5) 山名次郎『社会教育論』（小川利夫監修『社会教育基本文献資料集成・第1巻』、大空社、1992年、p 12）
- 6) 同上、山名、p 16～17
- 7) 佐藤「前掲3論文」、p 5
- 8) 同上、p 38～39
- 9) 同上、緒言、p 3
- 10) 山名「前掲5論文」、p 16
- 11) 拙稿「社会教育は、なぜ「社会教育」と命名されたのか(その3)」（『弘前大学教育学部紀要』103号、2010年）を参照して欲しい。
- 12) 山名「前掲5論文」、p 16
- 13) 同上、p 24
- 14) 倉内史郎「初期の社会教育論」『東洋大学紀要・人文科学紀要』、1957年、第10巻、p 111
- 15) 同上、p 112
- 16) 同上、p 121
- 17) 同上、p 121
- 18) 山名次郎、佐藤善治郎、井上亀五郎を宮坂広作は「社会改良的社会教育論」、小川利夫は「社会教育の源流」、大槻宏樹は「社会対策的社会教育論」としてひとくくりにしている。
- 19) 小川利夫「現代社会教育思想の生成」（小川利夫編『現代社会教育の理論』、亜紀書房、1977年、p 54）
- 20) 佐藤「前掲3論文」、p 13
- 21) 同上、p 12
- 22) 同上、p 24

- 23) 同上、p 24～25
- 24) 同上、p 25～26
- 25) 同上、p 27
- 26) 同上、p 34
- 27) 同上、p 35
- 28) 同上、p 36
- 29) 同上、p 75
- 30) 同上、p 38
- 31) 同上、p 31
- 32) 松田武雄は、佐藤善治郎の『最近社会教育法』について、「社会的教育学の潮流が日本に登場し始めたまさにその時期」に出版され、佐藤は「いち早く社会的教育学を強く意識して論じられている」と指摘している。（松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004年、p 84）。
- 33) 佐藤「前掲3論文」、p 34
- 34) 同上、p 35
- 35) 山名「前掲5論文」、p 21
- 36) 佐藤は、「貧民」「職工」「犯罪人」に関する諸問題への対策については非常に具体的である。主に犯罪あるいは貧困という側面からのアプローチであるため、取り締まりや救済策を指摘することが出来たからであろう。しかし、「上中流社会」「学生社会」の教育あつては、「輿論」の形成にそのほとんどを依存している。また「輿論」と同種である「社会の賞罰」に一章を割いてもいる。「輿論」が最も「社会」と直結していると考えたからであろう。
- 37) 山名「前掲5論文」、p 76
- 38) 佐藤「前掲3論文」、p 12
- 39) 杉之原寿一編『現代批判の社会学』、汐文社、1968年、p 22
- 40) 山名「前掲5論文」、序論 p 1
- 41) 佐藤「前掲3論文」、p 159
- 42) 井上亀五郎『農民の社会教育』（小川利夫監修『社会教育基本文献資料集成・第1巻』、大空社、1992年、緒言 p 110）
- 43) 松田「前掲32論文」、p 59
- 44) 小川「前掲19論文」、p 78
- 45) 森岡清美他編『新社会学辞典』1993年、有斐閣、p 150
(2010. 8. 9 受理)